

にあらず。如斯男業の處に至りては、當世の上手をいふ二間柄のウキ小身の如きものにては及びがたし。乍然我臂力に叶がたき刀鎗は必不可用。

一、富田勢源と梅津某の仕合

勝負の術は、勇を収めて妄に猛かるべからず。沈勇の者は必勝ち、浮勇の者は必負けべし。むかし富田勢源、越前を出て美濃に行けるに、其頃常陸國香嶋の住人梅津と云刀術の達人、濃州にありて刀法を教へ、我藝に誇り自流の外兵法なしと稱し、勢源が来るを聞て仕合せん事を望む。勢源聞て、兵法は凶賊を討べきものなり。梅津と某雙方罪なし、又相憤て勝負すべきにあらず、我刀術も亦未熟なり、不可相比と云。梅津聞て、勢源越前に在て口をきくとも、我太刀先にまはらば、活ざらん事を怖てかくいふらんとて、彌廣言に及ぶ。濃州太守齋藤義龍、勢源が寛容の器に荷擔し、吉崎伊豆・武藤淡路といふ兩人を以て仕合を望む。勢源辭之。使者已に三度に及ぶ。勢源今は不及是非とて命に隨ひ、檢使を乞ふ。武藤・吉崎を以て檢使とし、則吉崎が宅にて勝負有べしと定む。梅津は二夜三日身を清め信心を致す。

勢源にも齋戒を勸むる人あり。源曰。我常に心に信を存す。常に存せざる信を事に臨んで求むるとも、何の神か肯ひ給はん。我素より不仁の心を以て人を害せん事を思はず。再三に及て辭せんも武の本意に非ず。只人の望に應じて不得已也とて、既に其目に至れば、梅津は數十人の弟子を率ゐ、三尺六寸の木刀を袋に納て持之。勢源は手づから一尺三寸の木刀を携ふ。梅津、檢使へ向て眞劍を以て勝負せん事を願ふ。檢使勢源にかくと告る。源曰。相手は兎も角も我は木刀を用ふべしと云により、雙方木刀に究りぬ。梅津は大太刀、勢源は小太刀なるに、梅津が風情偏に獅子奮迅の勢に異らず。源は睡猫の新一鼠を見たる如く、聲をかけて勝負をなすに、梅津が首朱に成て血衣紋に流れかゝる。梅津奮て源を打つ。源笑て梅津が右の腕を強く打て、彼が木刀を打落し踏で折之。時に梅津腰刀を抜かんとすれども叶はずして仆る。勢源が氣勢、偏に破竹の勢なりしと。予が先輩土岐何某、其祖父土岐新右衛門能く其勝負を見たりしと語りし。

此話私鐵術の師或時咄申候。梅津何某名は兵庫と承候。

勢源持候は、黒木を布にて包候て持候と承候。且又去年か様の咄を書集候て、武藝小傳と申者出申候。此内に此咄御座候。是とは少相違仕候處も御座候。不遁者に求申候。

一、紀國弓に郡山鐵炮

或問。當時の諺に紀國弓に郡山鐵炮と申て、所々神社佛閣に和州郡山の住人稻葉六郎太夫重政と稱し、圖に顯はし、一貫目玉の鐵炮を抱て小筒の如く放之跡あり。彼城下においては如矢數大筒の數放しを致し、三十目筒にて一日に三千放、五十目筒にて二千放など打之。剩へ一貫目玉・七百目玉を、小筒の如く打候事前代未聞、日本無雙と申も理也。加之棒火矢・石火矢・大銃、都て火器一流の達人大野佐五右衛門吉規と云者有之よし。稻葉とは流も違候へども、彼一貫目玉の大銃を稻葉放之時、數百人の巧手見物すといへども、彼大野を檢使に乞請、彼が證文を取て懸物と致し、數百人の炮者を致鑿應候と申候。いかに其外の武藝も、右鐵炮の如く勵むのよし也。拾刃筒さへ打にくきものなり。此儀虚實の間難辨ものなり。其業實にして用に立事に侍るべき哉。答て曰。虚實の間難辨とは大なる僻言、武士の云

まじき事に候。武士たる者の偽を以て其ごとき事を可仕候哉。殊に神社佛閣に、我志願の遂げたるが爲に、繪馬をもかけたると見えたり。其事は名聞に似たれども、於武藝は天下無雙の人と云ふべし。但天下無雙の業の人、如此嗚呼がましき仕形は、誠に壯士の本意にあらず。但弓の堂を射るよりも其業は上なるべし。又用に立不立事は、足下よく弓を射られ候。一寸の弓を自由に肩入し、巻蘘を射られ候はゞ、八分の弓は荒木なりとも可易射候。乍然其一寸の弓を以て、戰場の高名は難成候はん。彼稻葉も一貫目だに打候間、百目二百目の鐵炮は、平人の三匁五分玉を打候ごとく自由成べし。それを以て石火矢のこゝろに慥に業をいたし候者、誠の達人と可申候哉。

一、手木足輕金田兄弟の大力

正徳四年御家の力者、手木足輕金田市五郎・大右衛門兄弟二人、深川八幡社へ參詣候處、社前に大石あり。此石往々力者のためしにせし石にて、其人々姓名年號等彫置たり。市五郎は大右衛門よりは、常に力増りて拾貫目づゝは重きを擧げぬ。それゆゑ若大右衛門不得擧においては、市五